

## 2014 後期 3 版式・形態事項の調査

はしぐち こうのすけ  
橋口 侯之介

### 和本を調査するカードの記入法

簡潔に記述する。デフォルトは記述しない。逆に特殊な事例は詳細に記す。貴重書かどうかの価値判断もすること

形態事項	⑨ 刊 写	※古活字版 木活字版 銅版 その他( )
	9.1 装訂	※折本 列帖装 卷子本 一枚物 その他( )
	9.2 書型	大 半 中 小 特大 横( ) 袖珍本 枡形 縦長 変型 寸法※ 縦 . cm × 横 . cm (×高さ . cm)
	9.3 表紙・題簽の描写※	
	9.4 丁数・丁付※	
	9.5 版式※	匡郭 縦 . cm × 横 . cm 単辺/双辺 界線(有・無) 頭部 注入 字詰め( 字 行) 点※ (付訓・無訓・など)
	9.6 挿絵※	絵入 図入 彩色刷 手彩色 その他( )
	9.7 料紙※	鳥の子(斐紙) 混ぜ漉き 薄葉 その他( )
	冊数 冊 帖 枚 舗 軸(巻) 幅 通	

#### 9-0 刊写の別

その本が版本なら「刊」、写本なら「写」と区別する。写本のとりかたは後述。

版本の場合、ほとんどは木版による整版である。それ以外の印刷方法のとき記入。

近世初期の活字版なら「古活字版」、同じ活字でも近世中期以降の木製活字本なら「木活字版」。

後期になると銅版(エッチング)印刷も出てくる。彩色刷のとき「合羽刷」というものもある。

#### 9-1 装訂

製本の形態を装訂という。(装丁は略字、装幀は布製の場合、装釘は金属を用いた綴じ)

四つ目ないしは五つ目綴の袋綴(中国では線装)がデフォルト。康熙綴、亀甲綴などは記述。

卷子・折本・折帖・粘葉装・列帖装(綴葉装)などを区別。地図や錦絵・絵暦など一枚物も和本である。冊数の項目と関連する。

#### 9-2 書型

本の大きさと形。美濃判半分(およそB5判)を大本といい、デフォルト。

その半分の大きさが中本。半紙判半分(A5判)を半紙本。その半分を小本という。

大本より大きいものを特大本。逆に小本より小さい本を袖珍本。

通常は縦横比率は1.4対1だが、ほぼ正方形なのを枡型、横方向を切ったものを縦長本。

横長にしたものを横本といい、中本横本、小本横本、大本を三分したものを三切本、四分したものを四切本などという。枡型も切り方のサイズで四半本、六半本と区別する。

#### 寸法

紙のサイズ、断裁方法によって同じ大本や半紙本も1センチ内外の差はあるが、おおむね基準に合致する。書型を記すことで基本的なサイズはわかるのだが、図書館では具体的な寸法を求める。棚に入れる都合か？

外形の縦と横をミリ単位で(26.5cmというふう)に採寸する。

厚さを計ることはあまりないが、どうせ記述するなら全巻揃いの状態で高さを計るのも役立つ。

### 9.3 表紙・題簽描写※

単色で模様のないものから、多色刷りの絵入りの表紙まで様々だが、その詳細を記述するには相当な経験と知識を要するので、貴重本でないかぎり**詳述は避ける**。

まず、原表紙なのか、原題簽がついているかどうかを見る(それも難しいことがある)。

草紙では、赤本・黒本・青本とあるので色がきめ手。題簽の有無が大事。合巻は初版初刷のときと後刷とで異なつたつけかたをする。

特殊な表紙(丹表紙、行成表紙、絹装など)は表記するべき。

題簽は、書名を入れた通常のもののほか、目次をいれた添え題簽があるものもある。後から作ったものや書き題簽は原題簽とはいわない。本に直接書いたものを打ちつけ書きという。

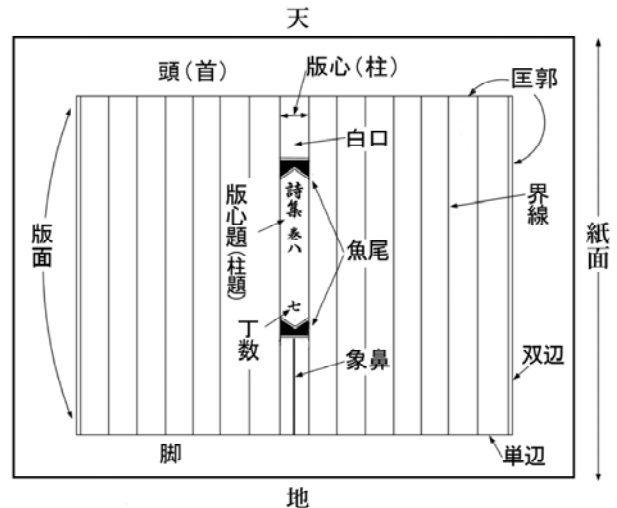
### 9.4 丁数・丁付※

丁数は各冊ごとに本文だけでなく序跋目録なども数える。広告(蔵板目録)は別に数える。

しかし貴重書以外はそのとくに必要はない。薄いものや、とくに厚い本は入れる。

### 9-5 版式 匡郭※

書誌的には外形寸法より、中の匡郭の縦横サイズをとるほうが役にたつ(貴重書の場合)。匡郭のあるなし、ある場合その罫線が一重なら単辺、子持ち罫なら双边という。行ごとに線が引かれていれば界線があるという。1頁(=半丁・半葉という)ごとの行数・文字数などは巻頭の次の頁ではかる(巻頭の題のところの行数がわかりにくい)。活字版、異板を調べるときにはこの行数が大事になる。



### 9.6 挿絵※

「絵入」という場合は、少なくとも1頁大(あるいは見開き)で絵が入るもの。これを挿絵という。説明的に図示する小さな図版がある本は「図入」とする。この絵が複数の色刷りとなっているときは「彩色刷」といい、後から筆彩で色をつけたものを「手彩色」という。とくに近世初期の挿絵に丹、緑、茶色の色をさつとつけた本を「丹緑本」という。唐本(中国刊本)では挿図、帯図という。

### 9.7 料紙※

江戸期の版本の大多数(9割以上)は楮を漉いた楮紙なので、これはデフォルトである。

雁皮を原料とした光沢のある紙を「鳥の子(斐紙)」という。そのごく薄い紙を「薄様」という。

上等な紙である。卷子本や奈良絵本は鳥の子が多いが、印刷には向かない。そのほか、楮と雁皮の「混ぜ漉き」、楮を丹念に叩いてつくる「打紙」が注目されている。

### 冊数と巻数

前回述べたように巻数と冊数は違う。

冊子本は基本的に「冊」でよい。粘葉装・列帖装も冊子である。

卷子は、「巻」ないしは「軸」。幅物(掛け軸)は「幅」

折本・折帖は「帖」

一枚物は「枚」でよいが、畳みもの(地図など)は「舗」、手紙・文書は「通」

## 写本の調べ方

現存する江戸時代の和本の点数別では半数近くが実は写本である。

版本にならなかったもの、というより積極的に写本はつくられた。

「写」は[写す]ことだけでなく[手で書く]という意味があり、オリジナルの草稿から数多くの「写したもの」まで多様である。

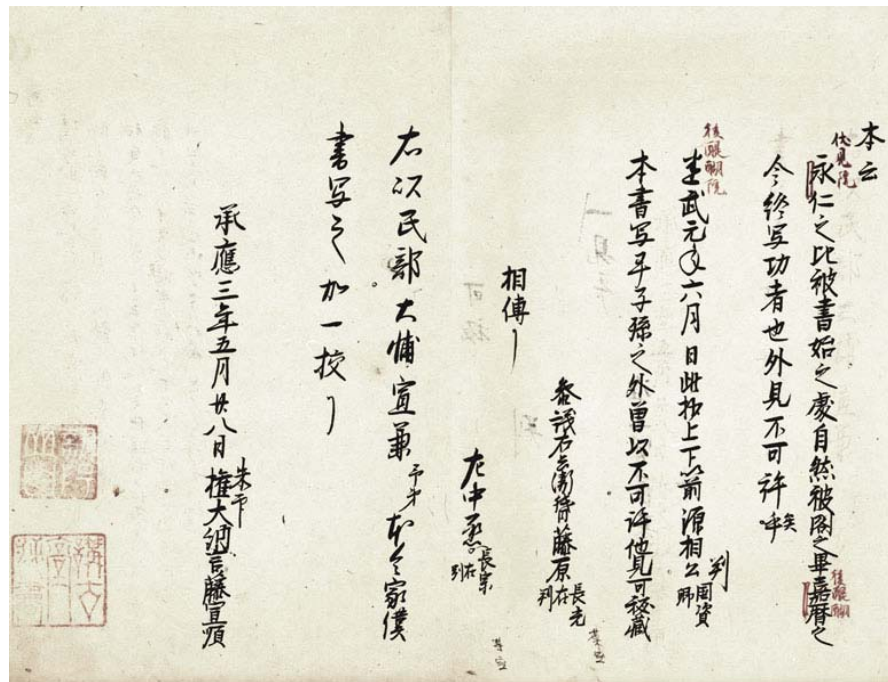
中世までを「写本の時代」、近世は「印刷本の時代」問いフレーズは通用しない。

## 奥付の起源

和本から現代の本に至るまで日本の印刷本独特の「奥付」は写本が主だった平安時代までさかのぼる。その本の来歴（由緒）を述べる重要な情報だった。

事例

『年中行事秘抄』  
建武元年葉室長光本奥書、承応三年中御門宣順写



「本云」、本にいう、とは本奥書にこうあるということ。

藤原長光（葉室）からその子長宗に相伝され、中御門宣兼を経て宣順の時に写された本。

応安元年冷泉為定本奥書、永禄元年三好長慶奥書本ともっともらしいが、現存する鴨長明の『四季物語』は偽書。

一般的な本でも、いつ、誰が写したかを知ることが重要。何の情報も無い本も多い。

